

令和年8度  
5月号



# 柳崎小だより

令和8年4月30日

学校 HP  
QRコード



学校教育目標 ~しなやかな心で、生き生きと学習し、元気よく運動する子~  
めざす児童像 <なかよくする子> <自ら考える子> <健康でがんばる子>  
めざす学校像 ワクワクと優しさがあふれる柳崎小学校  
児童在籍数 男子242名 女子231名 合計473名

## 「ワクワク」をあふれさせるために

校長 川端 浩司

「ワクワク」の中には、「やる気」「意欲」という感情が含まれますが、保護者の皆様は、お子さまに対して「もっとやる気を出してほしい」と感じることはありませんか。つい「勉強しなさい」「片付けなさい」と声をかけてしまいがちですが、埼玉大学の中井大介教授(学校心理学)は、大人が「やらせる教育」から、子供を「支える教育」へと転換することの重要性を説いています。

中井教授によれば、子供が自ら動き出すための鍵は、周囲の大人に対する「信頼感」にあるといいます。「この先生や親なら、失敗しても受け止めてくれる」という安心感があって初めて、子供の中に「もっとよくなりしたい」「やってみたい」という内発的な願いが芽生えるのです。



やる気とは、外から与えるものではなく、内側から湧き出てくるものです。私たち大人の役割は、先回りして指示を出すことではなく、子供が発する「助けてほしい」「見てほしい」というサインを丁寧に拾い上げ、自己決定を尊重しながら伴走することではないでしょうか。人は、誰かに決められたことよりも、「自分で決めたこと」に対してこそ、強い責任感と意欲を持って取り組みます。大人が「これをしなさい」と正解を提示し続けると、子供は次第に指示を待つようになり、自ら考える意欲を失ってしまいます。逆に、たとえ小さなことでも「自分で選んだ」という実感が、子供たちの「自己効力感(自分はやればできるという感覚)」を育みます。

例えば、宿題になかなか取り組めない時、「早くやりなさい」と命令するのではなく、「いつから始めるのが一番集中できそう?」「どの科目から片付ける?」と、選択肢を提示して本人に選ばせてみる。この「自分で選んだ」という小さな積み重ねが、自律性を育てる第一歩となります。

もし子供が選んだ結果、失敗したとしても、それは貴重な学びの機会です。「自分で決めてやってみた」というプロセスそのものを大人が認め、信頼して見守ることで、子供は次への意欲を蓄えていきます。

本校においても、「ワクワクと優しさがあふれる柳崎小学校」に向けて、一人ひとりの「やってみたい」という小さな芽を大切に育めるよう、教職員一同、子供たちの思いに寄り添った支援に努めてまいります。ご家庭におかれましても、結果だけでなく、その過程にあるお子さまの葛藤や努力を認め、励ましの声をかけていただければ幸いです。

